中国新聞

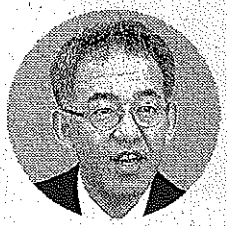
(3) 内政・総合 16版 2008年(平成20年) 12月28日 (日曜日)

今を読む

長崎大熱帯医学研究所教授
山本 太郎

正しい知識こそ防波堤

インフルエンザとの闘い



やまもと・たろう 1964年竹原市生まれ。長崎大医学部卒業。外務省国際協力局課長補佐などを経て昨年から現職。著書に「新型インフルエンザ」「ハイチ いのちとの闘い」など。長崎市。

今から九十年前の一九一八年。世界を襲った「疫病」があった。初期にこの疫病に見舞われたアメリカ東海岸・ボストンの公衆衛生担当者は、国内の他地域の担当者に次のようなメッセージを送ったという。

「まず木工職人と家具職人をかき集め、棺作りを始めさせておくこと。次に、街にたむろする労働者をかき集めて墓穴を掘らせておくこと。そうしておけば、少なくとも埋葬が間に合わず、死体がどんどんたまっていくという事態は避けられるはずだ」

○ ○ ○

医師の一人は「病院へ運ばれてきた当初、通常のインフルエンザに罹患しているだけのように思われた兵士たちは、しかし数時間のうちにこれまで見たこともないような急激な肺炎症状を示した。入院数時間後には耳から顔全体にチアノーゼが広がり、白人と黒人を区別することさえできなくなった」と記述した。

また、看護婦の一人は「何よりもわたしたちを驚かせ、おびえさせた症状は皮下気腫の存在だった。皮下に空気がたまり、それが体全体に広がっていく。破裂した肺から漏れ出た空気は、患者が寝返りを打つたびに、プチ、プチと音を立てた」と回想した。この看護婦は後に、同僚が近くで音に耐えられなかったという逸話も残されている。

被害はアメリカだけにとどまらなかった。一九一八年といえば、第一次世界大戦の末期。それまでモンロー主義のもと、中立を守っていたアメリカがヨーロッパ戦線への参戦を決めた年をもたらした。二千三百八十万人余りが罹患し、三十八万八千人余りが亡くなったという。当時の日本の人口は約五千五百万人。その被害の大きさがわかる。

○ ○ ○

現在、「H5N1」と呼ばれる鳥インフルエンザの流行が、アジアを中心とする国々で続いている。四百人近い人々が感染し、二百五十人を超える人々がそのために死亡している。感染者に占める死亡者の割合は六割を超える。スペイン風邪でさえ、致死率は数パーセントにすぎなかったと考えられているが、この鳥インフルエンザがヒト型インフルエンザへと変化した時どうなるのか。変化を予知することは容易ではない。しかも「既に導火線に火はついた」と説明する専門家は多く、その火を消すことはもはやできないという。

しかし、今できることもある。まずは正確な知識を持つこと。いつの時代も正確な知識は疫病に対する社会的ワクチンとなりうる。コレラ、エイズ、マラリア、結核においてもそれは正しい。万一、新型インフルエンザが現れたとすれば…。私たちにできることは何か。まず冷静な行動を心掛ける。パニックは事態を悪化させるだけである。

第二に無用な外出や集会を避け、流行拡大の速度を遅らせる。流行の遅延は病院など社会機能の破たんを回避できる。その上でワクチンが市場に出回るまでの時間を稼ぐ。こうした公衆衛生学的対策が世界的流行期の最も重要な対策になる。長期にわたってそうした行動をとり続けることは、考えているより簡単ではない。冷静な対応が求められるゆえんであろう。